



**Mountains,**

**water and people**

～山と水と人のつながり～



人との対話、自然との対話	4
人と自然のつながりを知る	5
川を学ぶ、水に学ぶ	6
ストーリー	8
マップ	10



表示 - 非営利 4.0 国際 (CC BY-NC 4.0)

この作品はクリエイティブ・コモンズ 表示 - 非営利  
4.0 国際 ライセンスの下に提供されています。

©2020 総合地球環境学研究所

## 深町 加津枝

京都大学大学院地球環境学堂  
准教授 造園学



## 吉田 丈人

総合地球環境学研究所／東京大学大学院総合文化研究科  
准教授 生態学



## 映像作成

### Mikhail Lylov (ミハイル・リロフ)

人と環境との関わりに注目した研究プロジェクトや映像制作を専門とする国際的な映像ディレクター。作品は、ロシア・ドイツ・日本などの国々で発表され、教育・社会活動にも積極的に関わっています。



# 人との対話、自然との対話

滋賀県の琵琶湖周辺の里山には、山－川－湖がつながった固有の生態系、そして長年にわたる人と自然とのかかわりのなかで育まれてきた文化があります。里山での人々の暮らしのなかで、多様な自然のつながりを生かしながら、地域ごとの生態的、文化的なネットワークが形成されてきたのです。こうしたネットワークの機能を物理的、精神的に高める役割を果たしてきたのが地域を縦横に結ぶ道や水路であり、これらは衣食住を支え、年中行事や信仰とも深く結びついてきました。

映像ディレクターとして国際的な実績をもつ Mikhail Lylov 氏は、琵琶湖周辺の安曇川、あどがわ西の湖、比良山麓、にしのか比叡山の門前町である坂本に通い、地元の人々との対話を重ねる中で映像記録を作り上げました。映画は、「山と水と人のつながり」をテーマとしており、「山」「水」「人」のつながりの大切さ、美しさなどが表現されています。そして、伝統的治水技術である霞堤、かすみてい琵琶湖と陸地を結ぶ内湖、ないこ地

元石材を用いた水路や石積みなど、地域に根ざした豊かな自然の恵みと防災減災の伝統的な知識・技術を Lylov 氏独自の視点で読み解き、可視化しています。また、地域に伝わる民具についてのお話や日吉大社の山王祭の場面では、日常生活や信仰を通した「山」「水」「人」のつながりを気づかせてくれます。

この映画は、日本語と英語の解説を含む教材として制作・公開されており、地域や教育の場などにおいて、「山」「水」「人」のつながりについての理解が深まり、対話のきっかけとして活用いただければ幸いです。

深町 加津枝



# 人と自然のつながりを知る

自然が私たちにもたらす恵みと災いは、たがいに深く関係しています。さまざまな自然の恵みが、私たちの生活を支え豊かなものになっています。その一方で、時として自然は、私たちに災いをもたらします。人がこの地に住みはじめて以来、自然の恵みと災いから絶え間なく影響をうけるなかで、人と自然のつながりの歴史が紡がれてきました。その長い歴史のなかで、自然と上手につきあうすべを、人々は学び身につけてきました。しかし、地域の人と自然のつながりは薄れつつあり、先人たちの知恵や技術は忘れ去られようとしています。

滋賀県にある琵琶湖の西には、<sup>きゅうしゅん</sup>急峻な山々が連なる比良山地があります。山に降った雨は深い森から流れ出し、急な斜面を流れ下り、集落の間を流れて、琵琶湖に達します。その流れのなかで、草や木や稲などが育ち、トンボや魚や鳥なども生きています。また、雨は急な斜面から土や岩を削り取り、それは川をくだって琵琶湖の美しいなぎさをつくります。山と湖の間には、人々が住む集落が古くからあります。人々は、近くにある山と湖の恵みによって支えられ、山と湖がもたらす災いをさけて生きてきました。人々の暮らしが自然と強くつながっていた時代には、山や川に人がはいる、自然の恵みや災いと上手につきあうすべを築いてきました。

燃料や食料などが地域の外から供給されると、人々の暮らしと自然との関係が変わり、自然の姿も変わってきました。しかし、以前と変わらない自然の営みも、今なおそこにあります。地球全体で気候が変わりつつあり、今までとは雨の降りかたも変わると予測されています。自然の恵みと災いは、今後も人々の暮らしに影響するでしょう。そのとき、先人たちの知恵や技術から学びつつ、人と自然のつながりを築きなおす必要があるのではないのでしょうか。

映画「山と水と人のつながり」は、比良山麓に住まう人々の暮らしが、山や川や湖とどうつながっているかを表現しています。この映画を見ると、比良山麓の自然の美しさや厳しさが伝わってきます。皆さんは、この映画を見てなにを感じて、人と自然のつながりにどんな思いを持つのでしょうか。映画が、人と自然のつながりを改めて考えるきっかけになることを、期待しています。

吉田 丈人



# 川を学ぶ、水に学ぶ

ほぼ1年かけて、私は、ある研究者と学生のグループを追いかけてきました。このグループは、琵琶湖周辺の自然災害に対して地域社会の人々が示す反応と、琵琶湖周辺での生態系を活用した防災減災（Eco-DRR）を調査しています。私は研究者の皆さんから学び、研究者の皆さんは地域の人々が語る話から学んでいました。そうした話は、人々が日々、環境と関わり、そこから得られた経験に基づくものでした。共同学習は、それ自体が興味深いプロセスです。共有された経験から、参加者の一人一人が違う結果にたどり着くのです。ですから、知識や事実や情報は、共同研究の過程で得られる貴重な成果のほんの一部でしかありません。たとえば、人は何かを学ぶ前に、まずそのテーマへの関心を育てます。そんな風に、ある事に注意を向けると、その注意そのものが、知識と同じくらい重要な研究の成果になっていきます。映画を作ること、何かのイメージを作るとは、何よりも、注意を向けることの練習になります。そして、何かに注意を向ければ、それがまた新しい注意を生み出します。いろいろな研究プロジェクトに参加させてもらううちに、私は、研究者も映画製作者も、やっていることの違いは違っても、どちらも地域社会の人々と互いに注意を向け合うことで、その地域に深くかかわっていく作業をしていると思うようになりました。こうしたシンプルな注意のやりとりから、新しい価値が生まれてくるのです。ある人に向けられた注意は、物事を評価する視点や姿勢になります。誰かの視点が自分の視点とは違うことに気づけば、自分の姿勢が変わってきます。映画製作者として、私は、こうした学びの次元に興味を惹かれます。この学びの次元は、知識の形成そのものを支え、それに寄り添うものです。

老子や莊子といった古代中国の哲学者たちは、川を眺め、水の性質を観察しながら、彼らの哲学的な英知を育んできました。山と川は、古代の哲学者たちの前に、自らを律する大きな存在として立ち現れます。ですから、川のあり方を観察する

ことで、私たちは力や倫理をどうやって使えばいいのか、学ぶことができるのです。言葉を変えると、古代中国の哲学者たちが知識に変えたいと願って注意を向けていたのは、川の姿勢や、水の振る舞いなのです。

たとえば老子は、私たちに、水が川の流れにどのように従うのかを学んで、同じように力とエネルギーを使いなさい、と勧めています。こうして、「無為」の理念が形作られたのです。「この世界は、ものごとがありのままの流れに沿うことで成り立っている。干渉しても支配することはできない。」<sup>1</sup>

霞堤は、近世の技術者たちが、川をそれ自身の性質に沿わせることで、川とともに暮らし、川を治めずに治める方法を学んでいたことの、良い実例ではないでしょうか？ ですから、「無為」と調和して何かをなすとは、その物の性質と調和して行動することで成果を得る、ということだと思えます。

現代の防災工学の観点では、水は破壊的な可能性を秘めているので、管理しなければならないものだと考えられています。そして、川を管理する、ということ、その目的は、水の力に対抗することになります。私から見ると、これは明らかに、近代的な力の概念を表しています。「力というものは暴力をふるう可能性があるもの」と定義しているのです。古代の哲学者の見方では、水は、「陰」に対応するもので、これも力ですが、少し違った種類の力なのです。なぜなら水は、求められればどんな形にもなり、自らの重さによってどんなに小さな裂け目も通るので、水には智覚の力があり創造的でありながら受動的な力があると考えられるのです。現代のテクノロジーの言葉を使えば、水の創造的な注意力は、私たちがエネルギーを効率的に使用し、より少しの行いでより多くを達成することを教えていると言えます。

老子は私たちに語ります。「為す無きを為し、事無きを事とし、味無きを味わう。」<sup>2</sup>

映画の制作中に、私は、大津市の日吉大社の山王祭りという、もう一つ別の魅力的な出来事に出会いました。これもまた、自然環境から学ぶことを教えてくれる良い教材です。この神事は、山の頂上から流れ下る水路に沿って行われます。この流れは、山頂を出て、田んぼや村を通り、最後に「家」<sup>3</sup>である琵琶湖にたどり着きます。白い法被を着て、丘を下って流れる人々の情景を思い浮かべると、山から流れてくる川を眺めて学んだことが、日吉大社の山王祭の原点に違いないと思えます。川の旅は、人の旅とは違います。川は、その源から離れずに、すでに目的地に到着しています。もし川が、その流れに沿って出発も到着もしないとすれば、それはつまり、永遠に回帰するということです（ちょうど祭りが毎年巡ってくるように）。川は永遠に回帰しますが、人は同じ川に二度入ることはできません。川を流れる水はいつも違うからです。<sup>4</sup>同じように、日吉大社の山王祭は毎回、季節の変化を祝います。「変化や違いといったものは、実際には、回帰すること、繰り返すことなのです。」—川は私たちに、そう教えてくれます。

深刻な生態学的な危機が生じるとき、私たちは、自然と有機的に調和した生活の方法を探したくなります。私にとって、この考え方は、おかしな物の見方に思えます。なぜなら、不調和や不一致も、同じように、展開する生命の営みの一部だからです。たとえば、地滑りや洪水といった、絶えず繰り返される生態学的なかく乱も、生態学的な条件を多様なものにして、生態系を豊かにしてくれます。ちょうど里山が、生態系の多様性を維持していくうえで、人間が引き起こす生態学的なかく乱にどんな価値があるのかをはっきりと示しているのと同じように、生態系を活用した防災減災（Eco-DRR）の取り組みも、健全な生態系を維持するために川がどんな価値を持っているのか、川のどんな性質が役に立っているのか、明らかにしてくれます。

Eco-DRR プロジェクトが焦点を当てている伝統的な技術と、現代の防災工学の主流になっている方法を比べると、力というものについての二つの異なる考え方を示しているように見えます。環

境哲学者のマリオン・ホアデキンは、こんな風に説明しています。

啓蒙主義<sup>けいもうしゆぎ</sup>から受け継がれた自然観は、何よりもまず人間の合理性に信頼を置いており、私たちの生活を制御し、計画し、方向づけ、周囲の世界を作り変えることを重視しています。この考え方に欠けているもの、それは、受容性です。受容性とは、「他者の視点を（…）他者から見られる際の好意的な目で見る能力と見ようとする傾向」に関わるものです。ですから、受容性は、<sup>いたわ</sup>労りと共感、さらにはもっと広く、私たちの感情的な生活と密接に結びついています。<sup>5</sup>

受容性は、中国の哲学者たちが水に見出した美德です。水の姿勢や性質に注意を向けることで、彼らは受容的にふるまうことが持つ意味を、理解することができたのです。それゆえ、私たちが水から学ぶことは、周りに影響を与えるための力ではなく、周りからの影響を受け入れるための力なのです。水は、他の人の視点を受け入れ、周囲の環境の在り方に調和して行動することを教えてくれるのです。

霞堤<sup>せき</sup>の堰、石の水路、石垣などは、どれも Eco-DRR プロジェクトが焦点を当てている技術ですが、こうした技術は、ただ人々の力が環境に影響を及ぼせることを証明するだけではなく、環境事象から影響を受けることの力を巧みに利用しています。ですから、こうした伝統的な技術は、その効率、機能性、耐久性といった面からだけではなく、環境に対する受容的な姿勢を体現しているという面からも、今日的な価値を持っているのです。こうした技術が再評価されることで、山や川からもっと学ぶ必要があると、人々に気づきを与えてくれるかも知れません。

Mikhail Lylov

1、老子道德経 第48章（馮家福、1972）

2、老子道德経 第63章（蜂屋邦夫、2008）

3、老子道德経 第32章

4、古代ギリシアの哲学者ヘラクレイトスの言葉「誰も同じ川に二度入ることはできない」

5、Marion Hourdequin（2016）

# ストーリー

## 1、守山公民館（セッション）

この映画の最初の上映会は、大津市守山地区で開催されました。地元の皆さんが上映会に参加し、映画について語り合い、映画の内容について議論しました。



## 2、霞堤

私たちの研究は、瀧さんのオフィスから始まりました。彼から霞堤について説明を受けた後、私たちは、昔、霞堤があった場所を訪ねました。いまは、川岸を眺めるだけでは、霞堤を見分けるのはとても難しいことです。無理もないことですが、霞堤について知っている住民もごくわずかです。



## 3、西の湖の漁師

ある漁師さんと西の湖で出会ったのは、まったくの偶然でした。漁師さんのさまざまな動きを見るだけで、多くの学びがありました。彼がどうやって水に網を投げるのか、魚を捕まえるうえで、いかに偶然と技能の両方を頼みにしているのか、じっくりと見て学びました。そうして理解したことは、漁師さんの網は一つの技術であり、それと共に人は偶然を受け入れているのだ、ということでした。霞堤も同じように一つの技術であり、人々はこれを通して自然災害を受け入れているのではないのでしょうか？



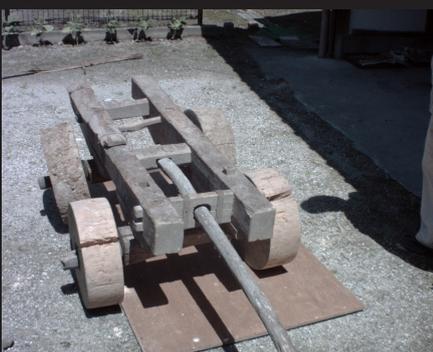
## 4、守山石

守山地区は、蓬萊山<sup>ほうらいさん</sup>の急斜面と琵琶湖の西岸に挟まれた場所に位置しています。石塚定二郎さんが語ってくれたお話から、有名な守山石は地すべりの後に採取されていたことを知りました。地すべりが里山まで石を運び降ろしていたのです。



## 5、民具

石塚定二郎さんと中井弘さんに、蓬萊山の斜面で守山石を運ぶために使われた荷車を見せて頂きました。荷車は牛に引かれて坂を下っていましたが、その牛はもう村にはいません。精巧な守山石の装飾品を鑑賞しながら、私たちは、守山石が生まれる場所を見てみたくなっていました。





## 6、長五郎岩<sup>ちょうごろういわ</sup>

現代的な防災施設からそう遠くないところで、長五郎岩を見つけました。守山地区に住む人々に敬われている巨大な岩です。おそらくこの岩は、自然災害に対する人々の意識に形を与えたものではないでしょうか。野離子川は岩の周りで折れ曲がるので、長五郎岩は、昔から守山地区を大きな地すべりから守る保護壁として働いています。



## 7、砂防堰堤<sup>さぼうえんてい</sup>

野離子川に沿って下って行くと、一連の巨大なコンクリートダムと堤防が視界に入ってきました。こうしたダムや堤防は、この地域で頻発する地すべりを防ぐために、野離子川に建設されたものでした。これらが建設されたおかげで、川岸の生態系をコンクリートで固めて損なうことと引き換えに、村で新しく開発された地域や、鉄道、道路などの安全が確保されたのです。



## 8、蓬萊山の植生

野離子川をさらに下り、私たちは里山にたどり着きました。深町さんは、かく乱の歴史が森林の構成にどう反映されているのか、説明してくれました。小さな地すべり、台風、薪による萌芽更新<sup>ぼうがこうしん</sup>といったかく乱は、森林の種の多様性に貢献しています。こうしたかく乱が及ぼす影響には、規模やタイミングが関係しています。深町さんは、私たちの足元にあるたくさんの石を指差しながら、「守山石は、イノシシの侵入を防いだり、地すべりの時に土砂の流れを堰き止めたりするための石垣をつくるのにも使われていました。」と説明してくれました。



## 9、日吉大社の山王祭

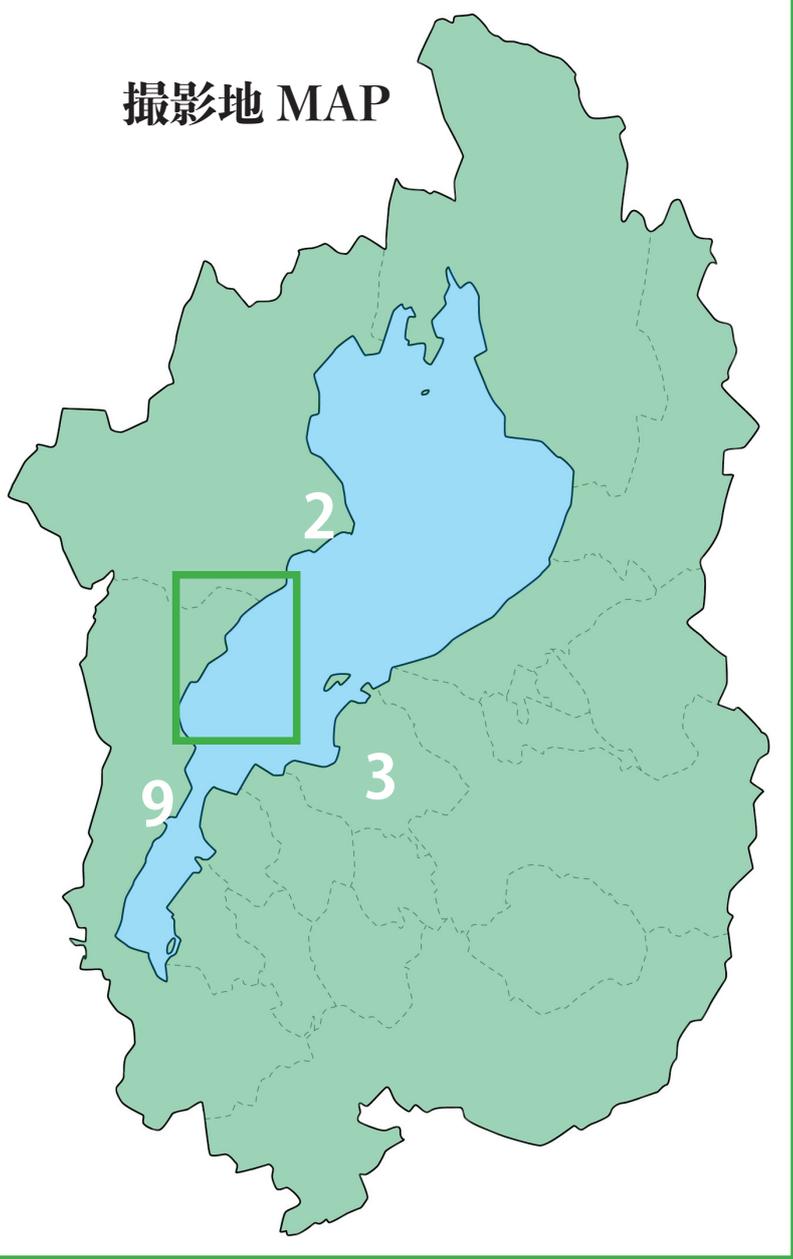
野離子川の水と一緒に蓬萊山を下り、私たちはようやく集落に到着しました。守山地区から南に数キロ離れた場所で行われる日吉大社の山王祭を見ることができたのは、とても幸運でした。山頂から湖岸に降りてくる人々の流れは、野離子川の水を思い出させてくれました。山から流れる川と同じように、人々の行列は下り坂を流れていき、村を通り、琵琶湖にたどり着きます。



## 10、北比良古地図

稲作文化において、実りを得られるかどうかは、水という要素と、土という要素にかかっています。近江舞子の琵琶湖の湖岸で、私たちは、水と土の間に立っていました。地域の人々のお話を聞き、昔の土地利用の様子を調べながら、私たちは、人々がこれら自然の要素とのかかわり方をどのように変化させてきたか、学ぶことができました。

# 撮影地 MAP



7  
6

4

志賀駅

8

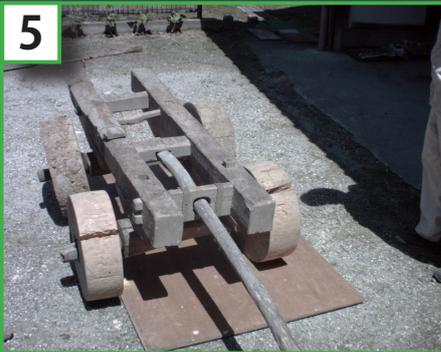
1

5

蓬萊駅

和邇駅

# 近江高島駅



# 近江舞子駅

10

# 比良駅

登場

瀧 健太郎 野間 直彦  
西の湖の漁師 小村 廣光  
石塚 定二郎 三好 岩生  
深町 加津枝 平出 直厚  
Andre De Antoni 磯田 潔

音響

Michal Krajczok

朗読された文献

宮家 準

『日本の民族宗教における自然観』

映像・編集・構想

Mikhail Lylov

翻訳（映像）

綾部 芳秀 村津 蘭  
石井 潤一郎

協力

Elke Marhofer 深町 加津枝  
吉田 丈人 中井 弘  
総合地球環境学研究所  
京都大学環境デザイン学研究室  
University of Gothenburg

撮影地

滋賀県

2018.03-2018.09

「山と水と人のつながり」

映像ディレクター

Mikhail Lylov

著者

深町 加津枝 吉田 丈人 Mikhail Lylov

翻訳（冊子）

Gavin Walton

発行元

総合地球環境学研究所

京都市北区上賀茂本山 457 番地 4

TEL : 075-707-2100 (代)

FAX : 075-707-2106

URL : <http://www.chikyu.ac.jp>

デザイン

島内 梨佐

編集

島内 梨佐 中井 美波  
安藤 滉一 千田 昌子  
他

発行日

2020.03

ISBN: 978-4-906888-70-2



総合地球環境学研究所

Eco-DRR プロジェクト

人口減少時代における気候変動適応としての生態系  
を活用した防災減災（Eco-DRR）の評価と社会実装